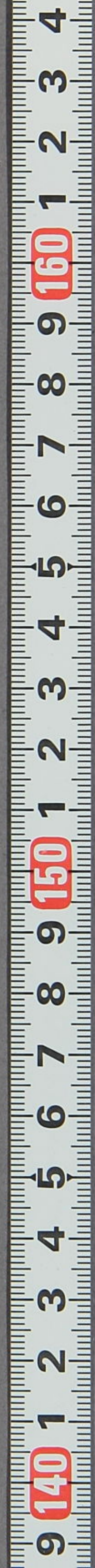
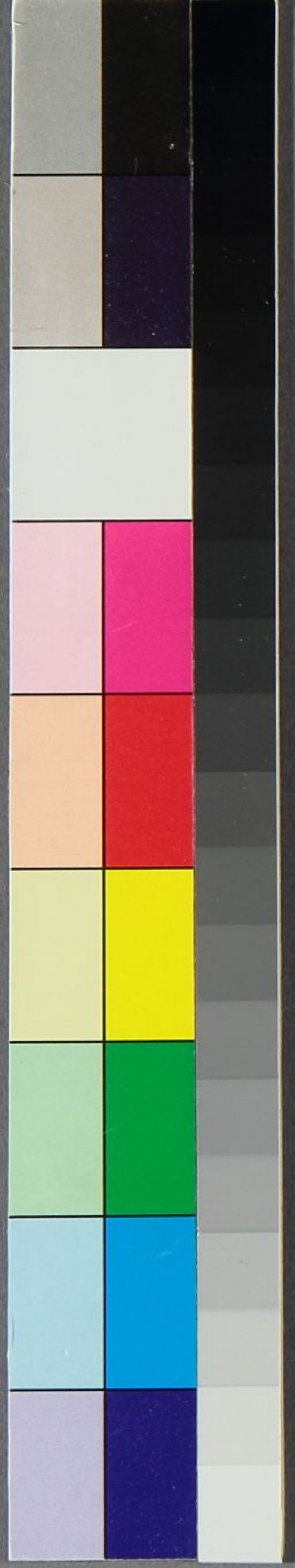


八代集抄

新古今神祇足利

五十卷

特別  
イ 4  
3163  
104(50)



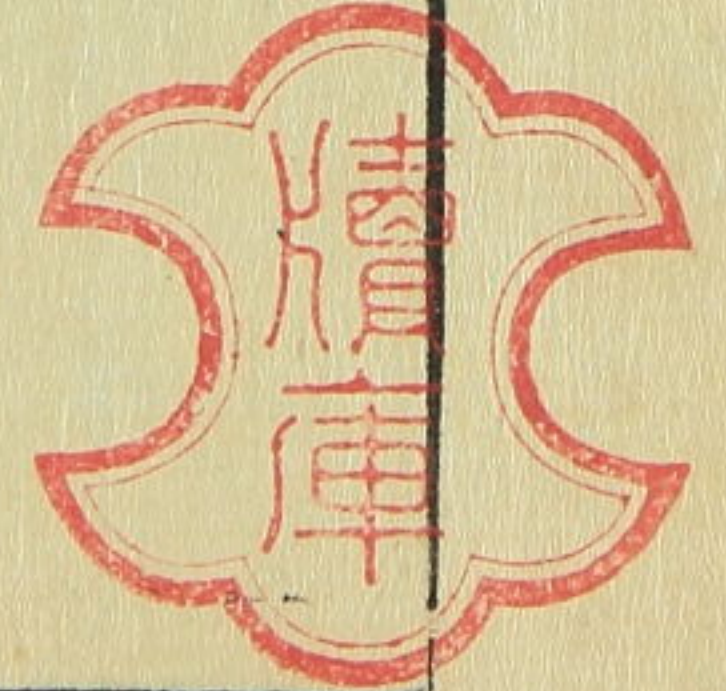
貴  
14  
3163  
104(50)



まゝしりやわらわの  
あんなやまゝいふ  
この心れをなまや  
子月せし社月のそ  
ねやうし業をさしこ  
とをきまうとさしこ  
今更とてまをさし  
さしひきまうと神代也  
あさけまうとあさ人  
た乃月やうとよく  
まゝしりやわらわ  
たれわとてい智願の  
祿判のあさひ

新古今和歌集巻第十九  
神代歌

まゝしりやわらわ子月れひめ小松  
おひんすままうとさりやうとさ  
こ乃月八日在乃社月のそ  
あさけまうとあさ人  
たれわとてい智願の  
祿判のあさひ



とて廿一梅系所は  
ありしをすまふ三  
つと大鏡よこゆ七  
幾梅とけしをつじ  
この神徳も七安  
樂寺拾遺云天神  
乎天満宮在<sup>三</sup>在<sup>三</sup>在<sup>三</sup>  
大宰府<sup>三</sup>  
神陀乃南の春の  
方乃はのりしゆ  
少らるゝの観音の  
侍止るゝを南京興  
福寺乃南乃とる  
の南圓堂を云く  
不空<sup>三</sup>觀音<sup>三</sup>と

けりしつちりるもの安樂寺  
乃梅をけりしつちりるもの安樂寺  
りりしつちりるもの安樂寺  
補陀乃南の春の堂とて  
いさうさうらんわ乃あまふ  
けりしつちりるもの安樂寺  
乃明神とてりりしつちりるもの安樂寺  
おやとてりりしつちりるもの安樂寺  
いさうさうらんわ乃あまふ

三十一

安置すはれをさう  
らとてりりしつちりるもの安樂寺  
おやとてりりしつちりるもの安樂寺  
いさうさうらんわ乃あまふ  
けりしつちりるもの安樂寺  
乃明神とてりりしつちりるもの安樂寺  
おやとてりりしつちりるもの安樂寺  
いさうさうらんわ乃あまふ  
けりしつちりるもの安樂寺  
乃梅をけりしつちりるもの安樂寺  
りりしつちりるもの安樂寺  
補陀乃南の春の堂とて  
いさうさうらんわ乃あまふ  
けりしつちりるもの安樂寺  
乃明神とてりりしつちりるもの安樂寺  
おやとてりりしつちりるもの安樂寺  
いさうさうらんわ乃あまふ

いりり年之ねも  
但言大明神ハ神功皇  
后ニ轉と云々  
てのちけのちり勸  
請せよせよのこまね  
いりり年ハ神功  
こまねハ神功  
ひらりハ神功  
岩乃雅ねりせハ  
ねんハ神功  
うまハ神功  
マハ神功  
ハ神功  
と君ハ神功  
法非規ハ神功

ねりり年之ねも  
は言ハ神功  
人ハ神功  
ねりり年之ねも  
ひらり年之ねも  
うま年之ねも  
マ年之ねも  
ハ年之ねも  
と君年之ねも  
法非規年之ねも

31

人ハ神功  
は言ハ神功  
一ハ神功  
集ハ神功  
各ハ神功  
海ハ神功  
今ハ神功  
こまねハ神功  
ハ神功  
もハ神功  
子ハ神功  
隆興ハ神功  
福ハ神功

人ハ神功  
神ハ神功  
一ハ神功  
集ハ神功  
各ハ神功  
海ハ神功  
今ハ神功  
こまねハ神功  
ハ神功  
もハ神功  
子ハ神功  
隆興ハ神功  
福ハ神功

くつハ納受所も一  
その由もつゝ一々の  
御まじり御心儀事  
所の言へ慈野の由  
こゝ

ぢつとして身はあつた。  
ある所紀伊守兼郡  
平ゆすの思ひあつた。  
わつ成務の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。

此の序の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。  
まじり所の思ひあつた。

たの宿まじり思ひ  
われらの思ひあつた。  
言旨云々思ひあつた。  
平ゆすの思ひあつた。  
本室の思ひあつた。  
ついで思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。

思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。

思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。  
思ひあつた。

うて我々の人々  
感念納まへんと  
のれうしん

人乃こゝろを我わすれめや  
石法乃乃居うしん

何れかつてまへ  
往まへけく見多  
法海の人のかい  
くくまへすの  
名法乃ハ八幡大菩薩  
けまへ袋まの  
下白より心をこ  
是孝謙天皇ヲ削法皇

あふすしんか  
け年ハ緒法天皇  
う休宮り  
志乃ひん

は謙位和氣清磨為使令  
清磨乃足を切く  
り清磨をいれ  
は集りハい  
是孝謙天皇ヲ削法皇  
は謙位和氣清磨為使令  
清磨乃足を切く  
り清磨をいれ  
は集りハい

あり海より  
あれを  
日本紀竟真  
六年十月廿二日終之同年  
三月十七日竟真  
貞保親王以下卅六人  
序者三統理平  
神日本磐余彦  
天皇此  
ま

延喜六年日本紀竟真  
磐余彦天皇大江千古  
ま  
あま

玉依姫ハ神武天皇乃  
乃妃  
足  
玉依姫乃

つひりけるをふりひめのこし事なるやれぬのさかりんとしてよめ  
れや但し神武天皇乃ゆりまよめをよめしと玉依姫の事なり  
さしゆ不常なるたは乃玉依姫のこしや可動令

久しかりあめや

後田彦

紀津彦

日本紀神代下云皇孫

久しかりあめや

乃離天磐座且排分天

久しかりあめや

八重雲稜威之道別

久しかりあめや

之高千穂崇天これ

久しかりあめや

瓊杵尊降臨の時

久しかりあめや

乃同書云權神對

久しかりあめや

日嗣天照大神之子今

久しかりあめや

當降行故奉迎相待吾名是

久しかりあめや

このいけらあめの名舟 日本書紀第三 神武天皇紀曰 東有羨地青山四周其  
中亦有乘天磐船飛降者余謂彼地必當足以恢弘天業先宅天下蓋六合  
之中心平厥飛降者謂是饒速日欤何不就而都之乎此神武天皇の  
所居之彼天乃いけらあめのりてといひける 饒速日命をいけらあめと  
り東征之のいけらあめと土蜘蛛命とをいひける 大和國橿原乃官  
所なりと都を定ませしむる也 此れを杜はしむるにや  
もいけらあめとてり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰  
國形如蜻蛉因是有秋津鳥之名之同書り何力下力く 大和の玉  
を杜はしむるにやいけらあめとてり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰  
玉依姫乃我のやういけらあめとてり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰  
及つとていけらあめとてり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰  
出まふるもや侍らん集まらる都れとてり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰  
てり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰  
りて 撰者乃あめとてり神武天皇御宇三年四月 天皇巡幸 望地勢曰

まゝく神を流すのら臨みよせまなりとさか合ましくなりあてめし能く乃遷  
い頭去乃右集りかたれら事た河きく作しそく乃而やと又げ歌のか  
そりめ乃くこひ乃ゆまてやゆらん志こく一集を志こくしては乃明  
兵を結ぶのち

やまのしをい梅り丸の  
いまののうらうう海母  
はならんやまのし梅り  
りつらんんんんんん  
りや午日えをり  
よお結ぶの聖安社

かまのしをい梅り丸の  
いはは乃りうらうう海母はならん  
神あをよふ侍き

絶筆

とくおれよとくしおれぬ  
神あまよおれんぬ  
とけつかれ若林宗  
のころよ午梅あまの香

とくおれよとくしおれぬ  
りをやえ人乃とめくおれん  
此時あをよめ

をくりり子とめられ  
いしにちやめ神とめく  
柿の香をとめまよふ  
あは神あの一めよこ  
うまこ一説書いぬ曲字  
やや人乃すれらるる

やや人乃すれらるる  
おけくこををくれりよすん  
大将りゆりり時勅使あく大神ま  
りまうてよふ侍らるる

橋政大臣

か養る流ら乃此河家  
子たま人小忌衣の上  
子木綿子午子子く  
おをいひけて誰も  
甲をすのん大老よこ  
うとのやまらん

神風や午のころう川乃の  
ちまかり事乃未をさす  
おあ一対お官あくよふ侍らるる  
最原定家朝臣  
誓まろくくめこや河のいあろく





何うのされしと名に宗族曰く云は井神流山といふ宮乃乃此の心代  
志を下して人乃心よこさるふやと云ふくあふ不神明王道乃光を信と  
事を取きこさるくは母乃此建の乃中流く月の光信出んを流めり  
その居心や神列曰く愚業いふ或は神の表況流抄ハ表況をく

神凡やと云ふてく

習塵愚業抄云々

ハ行幣之野列を豊

大也只わかいち

成之野の幣の四

は清の物も七

二の年と云れ

愚業神凡と云ふ

ひく甲と云ふ

と云ふ事

子やと云ふ下は

神凡やと云ふてく

かけく

志と云ふ

子やと云ふてく

露と云ふ

神流山月と云ふ

何れ乃と云ふ

野列云宮柱ハ之他ヨのりま中長被下下は志根云云柱大五と  
何り廣太云云神有り流と云ふぬ日乃由けと云ふ今乃世と云  
和光乃からぬと云ふ一愚業云柱志の志根なり云と云  
ハ伊勢乃由の御鎮座本紀曰倭姫命曰豊葦原瑞穂國之内余伊勢加  
流波夜之國波有羨宮処利止見定結比天自天上志天投降居給布天之  
逆鉾大小之金鈴五十口日之小宮之圖形之形等是也度天天之平年  
拍給甚壽於懐給此処不遷造日小宮大宮柱太敷立於下津磐根太田命  
以地輪精金津根奉敷之岐崎持風於高天之原云云と云ぬりのけし  
り云と大神云の云と云と云と云と云

神流山月と云ふてく  
云々日本紀神代上曰伊勢諸尊伊勢尊等共譏曰吾已生大八洲  
國及山川草木何不生天下之王者歎於是共生日神号大日靈貴  
此子光華明彩照徹於六合之内この心や云と云と云と云と云  
又曰次生月神其光彩

ツリニシテキテニシラス  
亞月可配配日而治之  
乃由之ヤク下也  
ヤクありたるわのる根  
わのる根、靈鷲山と  
て釋迦聖法華經を  
とせりて下也高部智  
念乃神道ハ神也  
本地ハ如來乃眾生救本  
乃方便ハ光を知けて  
神と稱せりてこと  
を言てよめる也  
是もわのる月讀森  
田云云ハ云云ハあり  
ヤクありていりあり  
言旨云大神宮乃也

伊勢乃月よ子乃社りまのりて  
月をんてよめる  
とヤクあるわのる根の定ぬり  
かけやまのる月よ子乃社り  
神祇乃并もてよめる  
前大僧正慈覺  
ヤクありていりありわのる氣をれや  
いすかまのる社の本れ月  
公に勅使もてかり侍るなり

感光乃世ますれ  
るを月よ子乃光  
をいする氣とよめり  
ありていりあり  
公に勅使乃時上日  
壹志驛宿國司供  
給之に法第ありり  
伊勢乃公同勅使り  
多らかりてふも  
河白波の娘也  
とすりて門天照太  
神宮とせりて  
大神宮乃其後也  
ア今ふりてす昔朝

ありりむまわもてよ子侍るなり  
中院入道右大臣  
多らかりてふも  
子とすりて門乃  
入道前國白家百首并りて侍るなり  
皇太后宮大史後成  
神凡やいすりて  
くちよすりて

後慈法師

乃家廟中くぢりきす  
ハ葉無便りし三枝引  
こしすぬ川乃強流し  
神風やまう一の松を

神風やまう一の松を  
うちとれ子やうし君をこころの事

玉串との伊勢やし柳と  
そのうららのまの内宮  
あまの心はゆき

六十首舞をまうし時  
越前 喜陽門院遊覧  
伊勢氏人女三

おみくせや山田あり

おみくせや山田ありしこれ柳あり

山田乃原に松宮之海  
日心をけりく形を  
すし事とのの距離を  
りけり日ちりきし

社外納涼とりあしを  
太中長明親 正建元年と  
在位時  
正五位下

よき川えやすし事  
後御鎮座本紀よ下は  
岩根は宿禰とす

いさ川えやすし事  
岩根は宿禰とす

まきくしとけりまわて  
岩根の松乃々凡の海  
まにまにまにえい秋  
まき凡の巻しかりり  
をさすおまやとの心

まき凡の巻しかりり  
香推宮乃松をよ子侍を  
カニ

法人と志

あまやうの香推乃  
野別公香推宮統お  
也八幡中くまうす  
こわか松のうらつき  
松乃まきひきき

あまやうのわらわら乃河や松を  
神乃子さきりし事 推別當 成乃力

あまの松の何るあまこ  
うまの八神神を侍  
あまの松の直する物  
まの松のまうしよ

あまの松の直する物  
はけ侍を 正建元年  
之長とす  
柳ありし事いあけまうし

あまの松のまうしよ  
めりし清家本とす

結ぶよまのふくし  
 ふくしり本條をえ  
 丁柳よま條をくく  
 少しよまの友のいふ  
 ふくしり本條をくく  
 をみけておせよとこ  
 果てをわらふ  
 年をくくおせよとこ  
 ふくしり本條をくく  
 まいさちよまの  
 うまの氣をえよとこ  
 清は流の川よまの  
 月よまの川よまの  
 心よまの川よまの

神よりこころをかけぬまのうまの  
田う

驚きよまの川よまの

周信同侍

心をくくおせよとこ

心をくくおせよとこ

文治六年女清入内屏風の所  
五

けいよまの川よまの

皇太后宮大夫後成

月よまの川よまの

おりよまの川よまの

ぬれ土

月よまの川よまの  
 乃ちよまの川よまの  
 又よまの川よまの  
 心をくくおせよとこ  
 社乃ち雷乃ちよまの  
 凡本條中よまの  
 心をくくおせよとこ  
 野列公人乃ちよまの  
 舟識よりよまの川よまの  
 心をくくおせよとこ  
 心をくくおせよとこ  
 心をくくおせよとこ  
 心をくくおせよとこ

社乃ち雷よりよまの川よまの

桜葉便の通  
本條中よまの

心をくくおせよとこ

心をくくおせよとこ

十首并合乃ち神祇をよまの

前大僧正慈海

心をくくおせよとこ

心をくくおせよとこ

心をくくおせよとこ

心をくくおせよとこ

忍さんともてりてさふ  
也彼社の法系とされ  
のりり  
何とてれ神まふ  
神まふとてれを  
けりもて極神とし  
清生とて極神の時部  
何とれりし一曰され  
い法系とてりり神  
まひのりり神われ  
いさうれをいれと  
おん牛とてりりり  
野別云大澤田に神  
田也貴布祿に極神の  
末社とてりりりりり

何とてれ神まふあひのりりり  
おめくあひをかゆくすさり  
社司貴布祿とてりりてあま  
こい志結る所ぬてよよめ  
おん牛とてりりりりりりり  
おん牛とてりりりりりりり  
鴨社乃并合とてりりりりり  
二月を 鴨長明

社司ともてりりりり  
愚索貴船に極神の  
とされはよの神とてり  
る川やせのりりり  
月も二佳きあれを  
其名く高社乃極神と  
小の長めくめしとてり  
新古今撰りりりりり  
ト人なりりりりりり  
乃も月とてりりりり  
えりりりりりりりり  
乃小川とてりりりり  
仍号石河津とてりり  
と上下暑

る川やせのりりりりり  
月もあれをいれりりり  
長明堂明抄とてりりり  
高社乃極神とてりりり  
鴨社乃并合とてりりり  
二月を 鴨長明  
春日系 二月上申日  
ありりりりりりりりり



ひまひまのちひさし

うまやうしやうし

やうわん神のまゝ

いひまゝを神とし

て神小形。後六。松乃

紫雲をねごとく。養

ちまこといひまゝ

をくまゝとし

やうらうのかけり藤

野列云やうらうの

雲跡の本の光の本光

乃如業也日吉の二宮

本地某師云て中道の本

すくも根本中道の本

すと某師云某師

出まゝ

前大僧正遺圖

やうわん神乃志る。いひまゝのいふ

ちまかりいひまゝのいふ

日吉社よりいひまゝのいふ

二宮を

やうらうのかけり藤

もとらひひかりいひまゝのいふ

述修乃心を

わりいひまゝのいふ

かけり藤

315

神の志はまゝ

わりいひまゝの志

云首云七乃社

社乃志る

まゝの本神

いひまゝ

やうらう

まゝ

いひまゝ

迷圖を

洞のや

いひまゝ

まゝ

いひまゝの志

云首云七乃社

社乃志る

まゝの本神

いひまゝ

やうらう

まゝ

いひまゝ

迷圖を

洞のや

いひまゝ

まゝ



凡たよりより算一を甲申に書し候り又此書は天は衆生をことば  
 乃原とつらかく書ぬ  
 さいねこのいとおのむらさき  
 和尚乃原は女の上の書家  
 乃原は女の上の書家  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの

太上天旨

うつしあつたされり  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの  
 乃原のいとおのむらさきの

徳大寺右大臣

こののち、塩屋の  
塩屋王子乃神年神  
彩念よりいさよと  
意代乃王子紀伊也  
九十九王子一なり

いさよ乃神のまじ  
うき世のまじに如  
夢幻のまじのま  
りま乃佛果をれ  
なれい我九心ま  
りまのまじをま  
お神ハ知まのま  
まじいまのまじ  
本官 彩ま 為 不 補 然 と

こののち、塩屋乃燐うす風  
あひくを神乃らるるま  
熊野一まうて侍よ意代のま  
ま人とらるるまのま  
侍にお殿乃まけいおまけ  
侍一うま 上人ま  
いさよ乃神ハまのま  
まのまうきまれま乃い  
熊野の本官まけく年の内  
遷官侍一うまのま

トそ也業師 釈者  
也伊結語伊其國とこ  
ちまのりあまのま  
毎長成神のま  
官乃候まのま  
まのまのまのま  
候まのまのまのま  
候まのまのまのま  
まのまのまのま  
まのまのまのま  
まのまのまのま  
まのまのまのま  
いんまのまのま

ちまのりあまのま  
まのまのまのま  
わまのまのまのま  
おまのまのまのま  
いりまのまのまのま  
乃まのまのまのま  
大上天皇  
たまのまのまのま  
まのまのまのま  
まのまのまのま  
一品 熊子内親王 位者 乃まのま

この山にせせりせ  
とていふこと

恒長乃とも松枝小  
屋松乃志の梅り  
ゆるは乃白草  
りしは竹とていふ  
ゆいより被松乃  
志の松をわし白松  
りり風信かかはり  
奉幣使 林常守  
ぬきませうの恒長  
すなりとていひ  
神よりいふとてい  
訪りよ恒長とてい  
とてい一箱の志とてい

人々舟よはるるよはれ。

石原通経

恒長乃とも松枝小  
屋の志しゆあわけぬ<sup>い</sup>あうるま  
奉幣使は恒長とていふ  
ひりすなりけることなりあま  
しりけるとていひ  
はちとてい  
すなりとていひ一箱の志とてい  
神よりいふとてい

神よりいふとてい  
りなき松乃志とてい  
志をいふとてい  
杖志心を志をい  
す恒長とていひ  
ありあられとてい  
離の志とてい

川やふる志のり  
八代神宮と川社乃  
神志志恒長説有  
瀬川よとてい  
り恒川の志とてい  
也 愚考  
上目書身合判  
信成といふ恒長之舟とてい

何れも乃屏風乃志とてい  
志の志とてい  
乃ゆい志  
りなき松乃志とてい  
すりける志の志とてい

延喜寺時屏風志  
志の志とてい  
よみ信り  
貫之

川やふる志のり  
りあせよとてい

信成といふ恒長之舟とてい



たうまの世の貪賊を  
賜うしり富をばね  
り(世の)あつて(成)  
山(の)くさ(る)わね  
智縁を月(は)し  
わ(は)る(ま)つ(て)  
任(務)を(う)つ(て)  
わ(せ)る(ま)つ(て)  
菩薩の(あ)り(ま)つ(て)  
可(う)く(ま)せ(の)佛  
波(の)は(い)つ(て)  
く(ま)つ(て)  
渡(ひ)つ(て)  
基(礎)波(の)橋(を)造(り)  
は(あ)る(ま)つ(て)

智縁上人今年伯耆乃大山乃世よまのりて出  
あんとあつるあつるあつるあつるあつる  
く(ま)つ(て)  
あ(つ)る(ま)つ(て)  
い(つ)ち(に)月(あり)つ(て)や(ら)ん  
難(波)乃(に)の(あ)つ(て)何(の)あ  
乃(う)く(ま)つ(て)  
行(基)基(礎) 乃世 傳(り)  
何(う)く(ま)せ(の)波(あり)つ(て)  
う(ま)の(あ)つ(て)わ(ら)ん

法師能乳悔附せり  
えり釋書にあり(ま)つ(て)  
阿(耨)多(羅)之(願)之(菩)提(の)  
成(者)よ(は)中(堂)建  
立(之)材(木)取(り)松(り)  
の(ま)つ(て)野  
列(云)阿(耨)多(羅)之(願)之(菩)提  
之(菩)提(乃)松(り)上(正)遍(智)と(り)佛(り)上(と)あ(つ)る(ま)つ(て)  
く(ま)つ(て)佛(の)す(れ)く(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
立(松)之(ハ)彼(材)木(とり)松(り)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
す(せ)せ(ま)つ(て)上(の)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
く(ま)つ(て)乃(建)立(乃)中(堂)成(就)す(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
延(暦)七(年)於(山)頂(創)一(宇)名(曰)乘(止)觀(院)自(刻)等(身)藥(師)佛(安)之(に)九(根)  
本(中)堂(あり)

唐乃時智光嘉祥三

唐乃時これ

比叡山中堂建立乃時

阿(耨)多(羅)之(願)之(菩)提(乃)松(り)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
わ(り)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
阿(耨)多(羅)之(願)之(菩)提(乃)松(り)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)  
わ(り)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)佛(乃)位(を)り(ま)つ(て)

延暦七年於山頂創一宇名曰乘止觀院自刻等身藥師佛安之に九根本中堂あり

年春同四春春分三

王明神唐末法

愛中心三り多り多り

仁壽二年の転入唐

法乃母さうてい

求法弘法乃母さう

母乃母さう

ハハさう

又か権さう

さうさう

時様お慈さう

若知徳乃さう

ハハさう

又さう

往さう

智徳大師

圓珠謚智徳  
園城寺祖

法乃母さうてい

神さう

菩提寺乃さう

ハハさう

さうさう

又さう

さうさう

乃さう

乃さう

乃さう

乃さう

乃さう

乃さう

寂莫乃さう

野列さう

也さう

也さう

けさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

寂莫乃さう

野列さう

也さう

也さう

けさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

いさう

多子千々として小孫  
あれは縁で乳ねるも  
りりこよあり

我よりよまの極楽  
舟り心解るる一  
往生要集を信く西  
方之勧發より極楽  
一乘要訣を著して  
元生成佛之義を  
一多き事とするは  
舟の心といふまじや

ふらりあき龜井の野  
身意乃六根より色  
塵乃六根より色  
心乃塵をすまきあり

惠心院号  
僧都源信  
横川信邦

我よりよまの極楽  
舟り心解るる一  
往生要集を信く西  
方之勧發より極楽  
一乘要訣を著して  
元生成佛之義を  
一多き事とするは  
舟の心といふまじや

天王寺乃龜井乃ありを  
上東門院

ふらりあき龜井乃ありを  
こら乃ちちりをするまじはるる

眼耳鼻舌  
身意乃六根より色  
塵乃六根より色  
心乃塵をすまきあり

三十三

提心をせよまの極  
野の心はあり心は  
提心をせよまの極

提達達多とりや五  
遊派の人心はあり  
提達達多とりや五

佛は成ぬはば舟の心  
八家乃於女文珠は  
男子とちあり

法華經北八品乃舟人  
提婆品の心を

わらりあき龜井乃ありを  
この舟あり

勸持品の心を  
大納言女信  
わらりあき龜井乃ありを

野別云は品乃心五百  
八十乃在阿含之佛の  
法をいふを志のふとあり

滅度の後西母の中より  
薩をとりて之を乃  
て所經をえんと

を教ふるを令のり  
を教ふるを令のり

此の佛法乃るを  
思慮鐘為就是經故  
於來世護持佛

只法をえりて  
空林院 常康親王造  
菩提講 彼も九法の成

二月をりより  
るまうて

空林院 常康親王造  
菩提講 彼も九法の成

るまうて

ひらきの中  
菩提講

を法を何あり

て法をいふ

涅槃經 佛祖統記  
具云摩訶般若

此云大滅度大即法身  
滅即解脫度即般若

一經始終純明三德  
此義四教集解ニモアリ

二月十五日涅槃  
此身を心を花吹

谷川のありけり

肥後

ひらきの中  
法をいふ

涅槃經よ  
池乃あり

春れをのり  
世傳れ

おのり

谷川乃あり

ふのり

ふのり



身は心は明らばし 涅槃經曰 衆生無有變易 一切衆生悉有佛性  
 これを以て月を以て譬之 常恒不變 若し月は常恒不變 月は常恒不變  
 乃ち常恒不變の一切衆生 悉く佛性あり ことわりを以て 譬之 月を以て譬之  
 一月の明らばし 一切衆生は悉く佛性あり ことわりを以て 譬之 月を以て譬之

法華經の中へ 前大備正意圖

おろりいさりや 女らふ  
 真ら寂定をす 即ちま  
 男を教りいさりやま  
 いの衆生を以て譬之  
 一月の明らばし 一切衆生  
 悉く佛性あり ことわりを以て 譬之 月を以て譬之  
 一月の明らばし 一切衆生  
 悉く佛性あり ことわりを以て 譬之 月を以て譬之

おろりいさりや 女らふ やちらふ やすい  
 かけや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや

ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや  
 ころのかりや 乃ち自落 乃ち自落  
 けりや せりや かりや かりや

觀心如月輪若  
 金剛般若經云 後  
 心自言 寂勝者 我不  
 見自心 此心為相何

觀心如月輪若 在輕霧中の  
 心を 推僧正公胤  
 わり心ふをとれや ぬれたきり

諸佛咸告言心相難  
測量授与心等言  
即誦徹心明觀心  
如月輪若在輕雲  
中如理諦觀察  
心念若在  
觀念  
且心獨  
緣覺の独覚  
十二因縁  
地獄餓飢畜生修羅人天聲聞緣覺菩薩佛界也

かろくにんゆゑのわけり月  
家子百首并後結く時十界  
乃心をよみ結く子縁覺乃こ  
ころを  
拈取大政大臣  
かく山よりひとり浮世いづれあま  
はねあまの心を風よちりめく

か山は独り世に  
縁覺の独覚  
十二因縁を  
よみたり常なきを風よ結く  
地獄餓飢畜生修羅人天聲聞縁覺菩薩佛界也

月法華のあり  
野列の色即是空  
乃心をよみ結く  
乃心をよみ結く  
乃心をよみ結く  
乃心をよみ結く

心經乃ころをよめる  
小持法  
乃心をよみ結く  
拈取大政大臣百首并十樂  
乃心をよみ結く  
寂蓮法師  
乃心をよみ結く  
乃心をよみ結く

よりの理乃ひいをもおんりしとておんれらうき世とてよまはれ  
 おんりしほ世とてつとての種土若域乃界とてえらうとてつとての  
 愚案極系十樂のつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 德無量百劫千劫説不能盡筆分喻分亦述然知然群疑論明三十三種益  
 安園抄標二十四樂既知稱揚只在入心今舉十樂而讚淨土猶如一毛  
 之滯大海一聖衆來迎樂二蓮華初開樂三身相神通樂四五妙  
 境及樂五快樂無邊樂六引接結緣樂七智光俱會樂八見佛開法樂  
 九隨心供佛樂十增進佛道樂也（正華）を承も迎もつとてつとてつとてつとて  
 とれやけうき世のわれ  
 極系う九品乃蓮華  
 あらうとてつとてつとて  
 一の所つとてつとて  
 つとてつとてつとてつとて  
 極系く花の能をのめ  
 のん初開のつとてつとて

蓮華初開樂

これやけうき世のわれとてあらん  
 花乃らわられけりけり  
 快樂不退樂

ひとらつとてつとてつとて  
 ごとくつとてつとて  
 つとてつとてつとてつとて  
 野列云極云快樂無極  
 長与道德合明永拔生凡根本つとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 りなまはれつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 愚案 往生要集のつとて快樂無邊樂つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 極も無量壽極天下也つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 根を接く不退つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 常や世の中れつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 云旨云釋云安樂國  
 清淨常轉無垢一  
 念及一時利益諸

引接結緣樂

つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
 つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

群生といふ極果は生  
生とくくはある元  
せを意のすくすく  
ふらふらの 畢竟は  
江を絶はたすは  
うしり我のりやぬ  
天台座主のうらも  
世の法華を我はたよ  
みの子のえうけり  
とてこの回經は梵苑  
雲中一印無障礙と  
風をくくわぬゆれ  
いのむはたのぬは  
そをやと同一と  
ありとありようき世の

法華經七八品并法持りたるは方便  
品唯一衆法乃こころを

前大僧正慈圓

いけしやも我のりやぬは法何  
うしり我のりやぬは法何

化城喻品化作大城廓

うしり我のりやぬは法何  
やとくわたりも若のりやぬは

ありとありようき世の野列を化城喻品といかりはシヤウツカタ大城廓といふ

譯和集義

三十八

身也といふをを求めよ人を法をいふを今にけり  
を知る五百中の上のまの山のまのりやぬは法何  
るのまのりやぬは法何  
師よといふはありやと今二百五十中の上のまのりやぬは法何  
二百五十中の上のまのりやぬは法何  
聲聞をさしひまのりやぬは法何  
世多ひてまはま大衆乃法華經をこころを即身成佛をたせ  
まのりやぬは法何  
まのりやぬは法何  
りやぬは法何  
りやぬは法何  
野列を不退地  
任すといふは法何  
經乃善堂の法

分別功德品或任不退地

りやぬは法何  
りやぬは法何  
りやぬは法何



自先蒙照身王奇乃心のお目とすことい佛乃出然しく狂遊をこととに  
うしそま冬のはけきさゆめくうの大業乃持まかましたる人よとよま衆少は  
各乃持の持乃執せをさる聲ゆ乃佛説をまことともえつ出つぬし  
お日れ氣をうけぬ谷のうしくまごにまむ

うこまゆく心乃れあど  
野列と五智とい五欲  
とまありぬれい五智の  
あまことあることあり  
人よ五腕阿乃ば腕  
よりかこまとぶ欲  
と云又ふ言とせられ  
とい根本をさるるこま  
観しつてと智とあまとま  
とてとて愚業妙觀察智亦名蓮花智と云ぬく菩提心論千載集三注  
とこまゆしつらり

家よ百有奇よまはつる時お智れ心と  
妙觀察智  
入道前関白大臣  
うこまゆく心乃れあど  
うしそまのりあまも人ん  
うしそまゆしつらり

勸持品 正三位經家

おまゆく我不變身命  
乃まれあどまゆしつらり  
このは乃まゆ命を  
推とまゆまもあり  
果やこれいおはる  
佛乃所囑乃はり  
か今といてはの  
こまゆけんこと

うしそまゆしつらり  
のりりりりりあちとまゆしん  
法師如乃杖瓦石念佛故慈無  
乃空を 寂蓮法師  
うしそまゆしつらり  
うしそまゆしつらり

法師品若説此經時  
有人惡口罵加乃杖瓦石念佛故應惡こあま世うけ經を説時あ  
惡口罵加乃杖瓦石念佛故應惡こあま世うけ經を説時あ  
こあ終り憶思といし釋者某まわらうのうすまひ一傷の得之奇の  
心こまゆしつらり杖瓦石まゆしつらり  
世のものこまゆしつらり法師の慈厚の心をまゆしつらり

身も心も空しくなりしは縁起の無きまじりてなきをねむりていふなり

いふ一乃ちまじりての  
野列を寫樓那号

者之佛乃不可一  
多ひく内り菩薩

乃行を神々如來の  
是聲聞を現すと

のまじりてのなり  
み乃廣く野と

空理をまじりての  
中くを時の大衆

群鹿所居故云鹿苑  
一乃の月内秘菩薩

初乃心  
二衆但空智如螢火

五百弟子品内秘菩薩修行乃心を

前大偏正慈圖

いふ乃ちまじりての野乃いなり

こ乃の月いこまじりて

空理をまじりての佛乃何含經を説く

中くを時の大衆乃月乃ありての鹿苑

群鹿所居故云鹿苑初乃の月内秘菩薩

初乃心に二衆但空智如螢火

法華云義十云大品云二  
衆智惠猶如螢火

久乃大智度論云  
云螢火虫亦不作是念

我光明能照諸  
諸聲聞辟支佛不作是念

類乃又何乃あるんれに可動く

覺也二衆いひまの小事諸法の空と

菩薩清凉月遊於畢  
竟空

寂蓮法師

み乃の乃りわくまじりて

ひ乃りての乃やみ乃り

諸聲聞辟支佛不作是念我智惠能照無量無邊衆生

類乃又何乃あるんれに可動く野列を寫樓那号

覺也二衆いひまの小事諸法の空と乃りての空と

菩薩清凉月遊於畢究竟空

空をれくまじりての空をれく

菩薩乃悟を照く

月乃の乃りての空をれく

竟寧く有りては

少く有りては

野別云云の法華經を

況よりんとして六乃瑞

相乃よりん衆喜瑞

とくとして人の天

竜雷ましくし何を

とまこといふは

と頻よ収乃心ま

を流を瑞とていじり

一かかゆるとい者り

あ言ちすとい収乃心ま

句やん六梅檀香凡乃心ま

文殊より沐勤乃心ま

以是知今佛欲說法華經と

梅檀香風况可衆心

少く有りては

びりかかゆるとい者り

作是教已獲至他國

やん少く有りては

あ言ちすとい収乃心ま

句やん六梅檀香凡乃心ま

文殊より沐勤乃心ま

以是知今佛欲說法華經と

びりかかゆるとい者り  
句やん六梅檀香凡乃心ま  
文殊より沐勤乃心ま  
以是知今佛欲說法華經と

やん少く有りては

あ言ちすとい収乃心ま

句やん六梅檀香凡乃心ま

文殊より沐勤乃心ま

以是知今佛欲說法華經と

びりかかゆるとい者り

句やん六梅檀香凡乃心ま

文殊より沐勤乃心ま

以是知今佛欲說法華經と

びりかかゆるとい者り

句やん六梅檀香凡乃心ま

文殊より沐勤乃心ま

以是知今佛欲說法華經と

びりかかゆるとい者り

句やん六梅檀香凡乃心ま

文殊より沐勤乃心ま

以是知今佛欲說法華經と

びりかかゆるとい者り

句やん六梅檀香凡乃心ま



法華經壽量品云是妙良藥今留在此汝可服服勿更不差作是教已獲  
至他國遣使還告汝汝已死此の文也

此日已過余即衰滅

此日已過余即衰滅

出曜經云此日已過  
命別域如小水魚

命別域如小水魚  
斯有何樂この文

命別域如小水魚  
斯有何樂この文

悲鳴啾啾痛戀本群  
素覺法師

悲鳴啾啾痛戀本群  
素覺法師

素覺法師  
寂然法師

寂然法師  
寂然法師

寂然法師  
寂然法師

奔思入無為

奔思入無為

悲華經云流轉三處  
中因愛不能斷奔

合會有別離  
源香店

恩入無為真實執  
恩者三畏欲畏色畏無色

合會有別離  
源香店

恩者三畏欲畏色畏無色

寂然法師

入生天を入られ

寂然法師

合會有別離  
涅槃經云支感必有衰  
合會有別離命為死所吞

合會有別離  
命為死所吞

無有法常者

無有法常者

同名欲往生 無量壽經下云其佛本願力同名欲往生皆悉到彼國

そらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
そらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
そらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
そらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
そらりきりそらりきり かりかりのそらりきり

心懐戀慕偈仰於佛

わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
ゆりりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
十戒乃舟よりたりたり 不殺生戒

品云 當生於難遭之想 ラニシキテレンホヲカツカシキ奉テ  
佛を去るをいさむるは

わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
心懐戀慕渴仰於佛 後種種善根 ラニシキテレンホヲカツカシキ奉テ

なめりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
なめりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
なめりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
なめりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
なめりきりそらりきり かりかりのそらりきり

不偷盜戒

不邪嬖戒

わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり  
わらりきりそらりきり かりかりのそらりきり

書註 西阿白波答

釋氏要覽云在家人受則云邪嬖  
若出家人受則云離邪行縁

法身を以て人法を以て善悪を以てしんがの極むる事あり

不茹酒戒

花乃其葉も酒をすまは  
るの杜無のわつらあり  
あり其葉のちまこつ  
をさひて解を袖ぐと  
謂詠花下三句

入道前國自家の十如是并よるを竹

くはよ 如是報 二条院讃波

うまもちをむり乃  
言旨云は葉組方便品  
十如是といふあり  
如是報といはるるを  
くはのほるるといふ也

待賢門院中納言人ふすしめて二十  
八品乃其よるをせ竹くはる序品廣

り二十

譯和集云 忍をのり  
まじももささる罪  
をくんくをささる

わらと(ま)おら(ま)ね福くら  
い(ま)く(ま)ち(ま)あ(ま)ん

度諸衆生其數無有量乃(く)らと

皇太后宣太史後成

經云其後當作佛号  
名曰弥勒度諸衆  
生其數無有量 上界

譯和集云 菩薩の意功密心乃時當坐此衆生を度(ト)はく(ト)ん(ト)と誓ひ  
を(ト)ら(ト)く(ト)佛(ト)成(ト)して(ト)衆生(ト)を(ト)度(ト)は(ト)く(ト)る(ト)を(ト)ら(ト)ん(ト)の(ト)彌(ト)勒(ト)佛(ト)の(ト)く  
量(ト)ら(ト)る(ト)衆生(ト)を(ト)度(ト)は(ト)く(ト)る(ト)に(ト)あ(ト)ら(ト)ぬ(ト)極(ト)多(ト)の(ト)衆生(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)ぬ(ト)乃  
心(ト)を(ト)極(ト)人(ト)を(ト)わ(ト)ら(ト)ず(ト)衆生(ト)を(ト)度(ト)は(ト)く(ト)る(ト)に(ト)あ(ト)ら(ト)ぬ(ト)極(ト)多(ト)の(ト)衆生(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)ぬ(ト)乃

大衆法をまこと  
善導の作れ六時礼  
讃(ハ)い(ハ)ふ(ハ)り(ハ)あ  
安ふり和讃(ハ)ん(ハ)

美福門院より極多六時讀の能  
よ(ハ)ら(ハ)ぬ(ハ)事(ハ)なる(ハ)事(ハ)なり(ハ)竹  
く(ハ)ら(ハ)る(ハ)事(ハ)なり(ハ)時(ハ)大衆法(ハ)を

いさうこれ入目を  
 観短乃目想觀の字  
 此一は身ハ極楽  
 往生志々<sup>ニ</sup>娑婆<sup>ニ</sup>  
 入目<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>也<sup>ニ</sup>  
 任他乃<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>者<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>歡<sup>ニ</sup>  
 喜<sup>ニ</sup>膽<sup>ニ</sup>仰<sup>ニ</sup>す<sup>レ</sup>也<sup>ニ</sup>  
 彼六時<sup>ニ</sup>儺<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>終<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>レ</sup>母<sup>ニ</sup>一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>も<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>れ<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>  
 是も彼六時儺乃<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>を<sup>レ</sup>ゆ<sup>ニ</sup>  
 と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 普晨朝入<sup>レ</sup>請定<sup>ニ</sup>  
 地藏延命<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>

いさうこれ入目を  
 此一は身ハ極楽  
 往生志々<sup>ニ</sup>娑婆<sup>ニ</sup>  
 入目<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>也<sup>ニ</sup>  
 任他乃<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>者<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>歡<sup>ニ</sup>  
 喜<sup>ニ</sup>膽<sup>ニ</sup>仰<sup>ニ</sup>す<sup>レ</sup>也<sup>ニ</sup>  
 彼六時<sup>ニ</sup>儺<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>終<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>レ</sup>母<sup>ニ</sup>一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>も<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>れ<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>  
 是も彼六時儺乃<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>を<sup>レ</sup>ゆ<sup>ニ</sup>  
 と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 普晨朝入<sup>レ</sup>請定<sup>ニ</sup>  
 地藏延命<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>

志のりある所つきの  
 上りの丸乃毎日晨  
 朝入請定乃言り  
 是より入<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>定<sup>ニ</sup>  
 今<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>念<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>  
 白<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>念<sup>ニ</sup>思<sup>レ</sup>惟<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>れ<sup>ニ</sup>  
 わら煩惱の事あれた  
 めやねと<sup>レ</sup>恥<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>  
 何<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 此の世も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 う<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>種<sup>ニ</sup>乃<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>常<sup>ニ</sup>  
 此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>た<sup>ニ</sup>  
 玉<sup>レ</sup>子<sup>ニ</sup>一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>

志のりある所つきの  
 式子内親王  
 此の心<sup>ニ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>た<sup>ニ</sup>  
 選子内親王 村上皇女  
 五百才子品乃心  
 僧都源信  
 玉<sup>レ</sup>子<sup>ニ</sup>一<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>

形字六

香首云衣裏實傳の  
心身なりやられし  
るやうし

維摩經 註 維摩者梵

語也此云淨名三惑已

淨即是真身名稱

周備即是應身此經

是淨名居士所説故

云維摩詰所説經

身や夢なりけし方便品云是身如夢為虛妄見

夢や夢なりけし野列云夢をりしをれとありしを夢也これを

夢現と分別しけし妄想ハいふ事ありけしはくさんとし

二月十五日佛入涅槃  
乃自入涅槃經の

集りたる也

ありありなりたる心身をいしし

維摩經十喻中よりけし身や夢といし

ころるを 赤澤衛門

夢や夢なりけしや夢とわりぬる

ころる世なりきとせんとすしん

是身如夢為虛妄見

夢や夢なりけし野列云夢をりしをれとありしを夢也これを

夢現と分別しけし妄想ハいふ事ありけしはくさんとし

二月十五日乃著くし伊勢大補り

とにけしけりたる

三十一七

相換

はねよりけしはく燐のよありや

あをころるま おひのやしん

あし 伊勢大補

くあいにくあふ系書ぬあのみ

おひい入日乃けけをありぬく

あむ法所をよひけたるふあり

へまよりいやありきまうてこし

月乃ありきまふふ門乃あを

こをともまうてよふくはり

はねよりけしはく燐のよあり  
野列云りしはく燐のよあり  
この佛の入滅とありしを  
梅檀乃ありしを燐  
とありしはく燐のよあり  
くあいにくあふ系書ぬあのみ  
おひい入日乃けけをありぬく  
あむ法所をよひけたるふあり  
へまよりいやありきまうてこし  
月乃ありきまふふ門乃あを  
こをともまうてよふくはり  
一本は汝肥後後世し  
こ云きよき金葉よき書之

あやきくちり

待賢門院

月子まねり  
とくつこ西行社  
生まへる寺師こお  
りまへる坊九ひあり  
うまに中あまのまここ  
とくつこえい月め極こ  
しらつくとててを  
まへとくつ我をの  
うまへまへるひら  
とくつまねるともあま  
即往安樂世界 注華

あひとまねるとあま月けり  
とくつこのあまらうあひまうあね  
あひ  
しらつくとててをわけ一月氣  
まへぬくとまげうまあねん  
人乃身まのりなほ結縁經供  
まへるいなるま即往安樂世界乃  
心をよめる 贖あよ人  
びり一ヶ月のひらとま

界阿鉢陀佛大菩薩  
衆園造住處生蓮

こよひやま子のあひらん  
觀心をよる侍

びり一ヶ月のひら

為行法師

云首云れハ花經  
某品若有女人聞  
此經一こありむ  
うまへるひら

やまねる心乃らうすむ月ハ  
あひらやまのやあまあ

やまねるうまひ  
東ハ慈心門南ハ惟行門西ハ菩提門北ハ涅槃門也菩提ハさ  
もされとまのひらやらうまあ

延寶八年癸九月十七日深筆同九年辛二月十八日此抄終切 季吟

冬第二 春舟下

歌三つと 中納言家持

山ささきも花もちりけくみづの  
やまれさうらひやうさうす<sup>い</sup>ちり

在 春舟下 花の香の上

題不知 赤人

恋しくいかにみよせんとわりやふ  
うへーあまのこもさうらわち

在 是川下 かくてこゝ上

冬第三 長哥

時多乃心をよみけり

題昭法師

ふとさすむじろをわけて心とや  
き乃ねさめりいともうす

在 三明下 さうらわの上

冬第五 秋舟下

題不知 惠慶法師

ふとさし乃かめりて鹿のね  
こもれをりもねも神り

在 書らふ下 海心の上





ことばをいふはあたふとむらうけか  
 風やうらやまのつらきまけ  
 せいのちかたれく今<sup>きん</sup>は  
 月志のまゝにあり森のこま  
 かのちかたれく一書り集  
 とおとせよのちかたれく  
 すされにうらやまのちかたれく  
 のちかたれく太政官の勅書か  
 序をかたれく一書り集  
 論をかたれくをたれく  
 序をかたれく一書り集  
 てすかたれく玉皇<sup>きん</sup>乃<sup>の</sup>

形二十廿一

一書り集  
 下乃<sup>の</sup>

改めおとせよのちかたれく  
 乃<sup>の</sup>中かたれく  
 序をかたれく一書り集  
 論をかたれくをたれく  
 序をかたれく一書り集  
 てすかたれく玉皇<sup>きん</sup>乃<sup>の</sup>

新古今集者元久上皇親以人<sup>の</sup>之撰併  
 為<sup>の</sup>廿卷<sup>の</sup>文質相文<sup>の</sup>實<sup>の</sup>兼<sup>の</sup>備<sup>の</sup>漢<sup>の</sup>序<sup>の</sup>則  
 六角堂<sup>の</sup>門<sup>の</sup>親<sup>の</sup>經<sup>の</sup>之<sup>の</sup>和<sup>の</sup>序<sup>の</sup>則<sup>の</sup>後<sup>の</sup>京<sup>の</sup>極<sup>の</sup>極<sup>の</sup>

共擬 淨製以化之寔可謂和弄之中  
真勅撰之上品者也學而習之玩而  
味之何人不入三十一字之道其名可留  
後五百年之時今以本者或將考之  
家令初寫之以一說之次改移字之  
認猶未盡善重為校本令校正可矣

壬辰小春

桃波判

八代集本與書

右八代集為備證本以數本再三令  
校正之早

文明第八二月中旬 牡丹花判

詠歌大概曰和歌無師以舊歌為師  
近來風體曰連哥至八代集用本歌  
故以和歌吟風花以連哥弄雪月者  
不可以不講八代集也謂古今集者  
二條家之正風而從假名之清濁至  
於夫三鳥三固之秘無其傳者不能  
讀之後撰拾遺等亦不可不習其清  
濁也偶有註解訓說秘而不傳故童

蒙之輩未抱臨渴問津之患者幾希  
焉益惟神聖之世詠八雲具四妙  
以來贊王綱厚人倫成教誠之端  
者莫逆於和歌連哥以故累代之  
天子勅令撰集不當世垂後代是所  
以和歌為和歌也偏秘而不傳者非  
和哥之大意乎本邦之諸書藏於  
密而淪沒者比比有之吾恒慨此因

茲於古今集直載古抄其餘之七代  
集或襲先達之註解或用前人之訓  
說定為百八冊名曰八色抄刊布而  
壽於久遠呼乎吾薄識淺見安足窮  
其淵微唯欲為童蒙之輩行千里進  
一步之得也居蓬蒿而置言於勅撰  
之和歌竊比種玉老人訓釋萬葉等  
云天和二年仲春時正日北村季吟

秉筆於拾穗之菴下

天和二年中夏吉辰梓行畢

北村湖春

村上勘兵衛

卷下廿四

